▼最優秀賞受賞作品（エッセイ）

はなをくんくん

平　英男

私の部屋の本棚に、黄色い表紙の同じ絵本が三冊ある。ルース・クラウス文、マーク・シーモント絵、木島始訳「はなをくんくん」、一冊は一九六七年発行の初版本、もう一冊は二〇〇六年発行の一〇〇刷版、残りの一冊はアメリカで出版された原書版である。原書は題名が「THE HAPPY DAY」となっている。地味な単色のこの絵本は、私にとってなくてはならない大切な本なのだ。

この本が日本で初版発行されたのは一九六七年、五十年以上も昔だ。でもこの本と出会ったあの日のことを私は今も鮮明に覚えている。三重大学教育学部の音楽科を卒業し、四月から鳥羽市立神島中学校へ音楽教師として赴任することが決まっていた三月の下旬、桜のつぼみがふくらみ、今にも咲きだしそうな、春がそこまで来ているようなあたたかい日のことだった。

その少し前、三重県の新採教員の赴任校を決める面接があって、そこで「どこでもいいです」と答えたため、行き手がなくて困っていたらしい鳥羽市立神島中に即座に決定、そもそも小学校の採用試験を受けたのに、なぜ中学校に回されるのかという疑問はあったが、「まあ、どこでもいいや」という軽い気持ちで承知してしまった。

ところが家に帰り、赴任地が決まったことを家族に告げると、家族はびっくりして、猛反対した。

「神島は離れ小島で電気や飲み水にも不自由するそうだ」とか「台風が来ると何日も船が欠航し、食べ物にも困るそうだ」などと、今思うと神島の人々にずいぶん失礼な言動だと思うのだが、そういって気の弱い私を心配させた。僻地教育に情熱を注いで、という高い理想もなく、「どうせ家から通えないのだったらどこでも同じだ」といういい加減な気持ちだった私は、そんな家族の言葉にやっぱり動揺した。

そのころ私は大学のクラブ活動の他に、名古屋のアマチュアオーケストラでオーボエを吹いていて、できることならそれを続けたかったし、教師になったら、オーケストラか吹奏楽のクラブをつくってがんばろうと思っていたのだけれど、よく考えたら鳥羽の離島、全校生徒六十六人の神島中ではそんなこともできなくなる。月に二回ほど名古屋で受けていた、オーボエのレッスンにも通えなくなるし、いろんな演奏会も聴けなくなる。そういう事実に気がつくと、それはやはりショックだった。プロの演奏家になるつもりはなかったし、なれるはずもなかったが、できることならオーケストラもレッスンも続けたかった。

僻地教育の重要性はわかる。やりがいのある仕事だと思うし、おそらく子どもたちとの毎日は楽しいだろう。しかし神島の子どもたちとの生活の中で、教育のことだけを考え、学校という温床の中に

どっぷりとつかっていてよいのだろうか。そうした諦念みたいなものを抱くには自分はまだまだ若いはずだ。勉強しなければいけないことも多いはずだ。オーケストラや吹奏楽への渇望の中で、その可能性がほとんど閉ざされた中に自分を置くことが、不安というより、信じられない気持ちだった。

そんな悶々とした気持ちを抱えて津の街を歩いていた私は、津駅前の本屋さんで一冊の絵本に出会った。普段なら絵本などを本屋で立ち読みなんてしないのだけれど、その時は帯の「羽仁進氏絶賛」という宣伝文句にひかれてしまって、思わず手に取ってしまった。羽仁進は当時のドキュメンタリー映画監督で、ちょっと有名だったからだ。

最初の方は何が何だかわからなかった。けれど最後のページの小さな黄色い花にたどりついた時、私は身体中がジーンとしびれたようになって、その場に立ちすくんで動けなくなってしまった。これは今考えると、当の本人の私でさえどうしてそうなったのか信じられないので、とても他の人には信じてもらえないかもしれない。しかし実際そうだったのだ。しばらくして冷静になって、私はうれしくて涙が出そうになった。『そうだ、どんなところにだって花は咲くのだ。みんなではなをくんくんさせて、その花を見つけるのだ』

三月三十日、風が全くないあたたかい凪の日、兄が近所で軽トラックを借りて運転してくれて、鳥羽まで布団袋とスーツケースを運んでくれた。その布団袋を、春の陽ざしがたっぷりと降り注いだ定期船の甲板に置き、時々そこに腰を下ろしながら、周りの景色を楽しみ、まるで観光旅行をしている気分で神島までの船旅を楽しんだ。

神島漁港の桟橋に着くと、教頭先生と男子中学生五人が迎えてくれて、アッという間に坂の上の下宿まで荷物を運んでくれた。

そうして私の新米教師生活がスタートした。

アコーディオンは寄せては返す波
ピアニカは船の汽笛

小太鼓は遠く聞こえる潮騒
小さな島の
小さな学校の
小さな小さな合奏クラブ

そんな言葉で始まる詩（?）を音楽室（といっても兼理科室、兼技術家庭科室、兼美術室、すなわち特別教室は一つしかない）に掲示し、たった五人の生徒を集めて、神中音楽クラブをつくったのは、赴任して二か月ほど経った、たしか五月の終わりごろのことだった。

「運動の苦手な子や、医者から強い運動を止められて、クラブ活動をやっていない子がいる。そんな子たちのために音楽クラブがやれないだろうか?」ようやく少し島での生活にも慣れ、教師としても何とかやっていけそうだ、と感じ始めていた五月の初め、帰りがけに校長先生からそんな声をかけられた。

全校生徒六十六人の神島中のクラブ活動は、男子は野球部とバレーボール部、女子はバレーボール部とソフトボール部しかなかった。どのクラブも熱心で放課後遅くまで練習していた。そんなきつい

練習に参加できず、どのクラブにも所属していない子がいることを校長先生は心配したのだろう、私は喜んで引き受けた。

次の日から学校にある楽器の修理に追われた。なんとか使えそうな楽器をかき集め、修理し、部員募集をした。そして、二台のアコーディオン、大太鼓、小太鼓、木琴、たった五人の小さな合奏団が誕生した。二週間ぐらい猛練習し、六月にある鳥羽市の中学校体育大会への校内壮行会で初めて校歌の演奏を披露した。上手というには程遠い演奏だったが、聴いていた生徒も先生も「すごい、すごい」とほめてくれた。すると、「私たちも音楽クラブに入れてください」と四人の入部希望者が現れた。校長先生も大変喜んでくれて、新しく、二台のアコーディオンとコントラバスを買ってくれた。それに私の手持ちのフルートとピアニカを加え、たった九人の神中リードオーケストラが誕生した。

バラが咲いた
かあさんの歌
星影のワルツ
童謡メドレー
白鳥の湖

オーケストラには程遠い、たった九人の雑奏ではあったが、生徒と私は毎日必死になって練習した。コンクールに出場するのでもない、演奏会の予定もない、誰にも聴いてもらえない、自分たちだけのために演奏したあの音楽が、私の音楽の原点だったのだ。何もできない新米の先生だったけど、情熱だけは人一倍持っていると自負していたあの頃が、せつなく、いとおしく、なつかしく思い出される。

あれが小さな黄色い花だったのだろうか？夢中にやっている時にそんなことを意識したことはない。しかしあの時「はなをくんくん」に出会わなかったら、あの小さな黄色い花を見つけなかったら、私は合奏クラブをつくっただろうか、と考えるのだ。

〝まっ暗な空にだって、朝はだんだん見えてくる〟

〝冷たい雪の中だって、もう春がそこまで来ている〟

希望を持って生きることは大切だし、必要なことだと思う。しかし苦しい現実の今の生活の中だって、きっと何かがあるはずだ。そしてそれは自分で見つけなければならないのだ。生きるということは、生きている〝今〟が大切なのだ。そんなことを、直接にではなく、知らず知らずのうちに、ジワーとこの本から影響されたように思う。

花がこんな小さなちっぽけな花だからこそ、感動したのだとも思う。こんな花を見つけたからといって、動物たちはおなかがふくれるわけでもない、何のたしにもならないちっぽけな花をこんなに大騒ぎして見つけることに、何ともいえぬ感動を覚えたのだ。

どうしても目先のことだけに気を取られ、直接自分に関係のあることだけ必死になるという生活の中で、〝ほんとうに大切なものは何か〟ということを見失わないことが、いかに大切かということを強く感じたのである。

〝生きるということはこんな黄色い花を見つけることなのだ〟

〝それは決して、派手な立派な花ではなく誰にも気づかれずにひっそりと咲いている花なのだ〟

〝そして人生でそんな花を見つけることが、生きる喜びにつながるのだ〟

あれから何度この本を読んだだろう。いろんなことがうまくいかない時、何度この本になぐさめられただろう。どんな時でも「いや努力すればきっと黄色い花が見つけられるはずだ」そう思った。

七十六歳になった今、もう燃えることも、ときめくこともなくなってしまった。毎日を静かに淡々と生きている。絵本を読んで感動することもめっきり少なくなった。しかしこの「はなをくんくん」だけは今もページを開けただけでドキドキする。

読んでいくうちに、神島の古里の浜の潮風の匂いがよみがえってくる。オンボロ校舎の音楽室が目に浮かんでくる。こどもたちと演奏した「白鳥の湖」が聞こえてくる。なつかしく、せつなく、泣きたいような思いで胸がいっぱいになる。

そして最後の小さな黄色い花を見つけた時、何ともあたたかい幸福な気持ちになるのだ。